

すっきりとすこやかに

奨励	小笠原 純【おがさわら・じゅん】
奨励者紹介	日本キリスト教団高槻日吉台教会牧師

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、`霊に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁華ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

(マタイによる福音書 4章1―11節)

保育園でのお話

高槻日吉台教会の牧師の小笠原純と言います。はじめまして。わたしは以前、四国の愛媛県の小松町というところで、保育園の園長をしていました。その保育園の園長になったのは、いまだ15年くらい前でしたので、ちょうどそのときのこどもたちが大学生になっています。保育園ではこどもの礼拝があり、こどもたちに聖書のお話をしていました。今日の新約聖書の箇所です話をすることがあります。こんな感じでした。

「今日は、みんなの大好きなイエスさまのところに、悪魔が現れたお話をします。イエスさまのところに悪魔がやって来ました。悪魔はイエスさまに言いました。『あなたは神さまの子でしょ。だったら、石をパンにかえてごらんさないよ。お腹がすいておられるんでしょ』。そのときイエスさまは悪魔に言いました。『人はパンだけで生きるものではない。神さまの御言葉によって生きるんだ』。それを聞いた悪魔は、イエスさまを高い塔に連れていき、そしてまたイエスさまに言いました。『イエスさま、あなたが神さまの子だというのなら、この塔から飛び降りてごらんさないよ。そうしたら天使たちが助けてくれるでしょう』。イエスさまはまた悪魔に言いました。『神さまを試すようなことをしてはいけない』。それを聞いた悪魔は、またイエスさまに言いました。『ぼくの家来になるなら、ここから見える街を全部あなたにあげる。だからぼくの家来になりなさいよ』。みんなだったらどうする？悪魔の家来になる？（ならないー）。え、でもおいしいものいっぱい食べられるよ。おもちゃもいっぱい買ってもらえるよ。どうする？（ならないー）。イエスさまは『退け、サタン』と言って、悪魔をやっつけてしまいました。悪魔はこんなになって逃げていきました。みんなの心のなかにも、わがままな気持ちってないですか。静かにせんといかんのやけど、『おちゃらけしたいから、おちゃらけしよう』とか『片づけせんといかんのやけど、めんどいから片づけせんとこ』とか。（ないー）。みんなの心のなかにも、わがままな気持ちに悪魔が近づいてくるかもしれないから、気をつけてね。でも、もしも、みんなの心がよわくなくても、イエスさまが悪魔をやっつけてくれるから、だいじょうぶ。イエスさまが悪魔をやっつけてくださって、よかったね」と、こどもたちに話しました。みんな元気よく、「悪魔の家来になる？」と聞いたら、ならないと答えてくれたり、「片づけんとこっていう、わがままな気持ちはない？」と聞いたら、ないと答えてくれます。そう言うわりには、ケンカしたり、片づけなかったりしてるんは、なぜかなあと思ったりしますが、まあすすく、のびのび、みんな大きくなってきていました。

保育園のこどもたち

保育園のこどもの礼拝のとき、こどもたちはお行儀よく、正座して、お話を聞いてくれていました。わたしはお行儀のよいこどもになってほしいと思っているわけではありません。そうではなくて、静かにすっきりとすることが気持ちいいことなんだということを感じてもらいたいです。心が落ち着いていると、体も落ち着いてきますし、逆に体が落ち着くことを知っているとか、心も落ち着いてきます。皆さんもあわてているとき、体で深呼吸とかしますよね。すると体だけでなく、心も落ち着いてくるわけです。皆さんも、静かにすっきりとしていると、やっぱり気持ちがよいでしょう。そして神さまのほうへ心を向けると、またすっきりと、心が落ち着いてくるのです。厳肅な気持ちが、こどもたちのなかに生まれます。こうした雰囲気、体が覚えていると、大きくなって、「キレる」人間になりにくいだろうと、わたしは思います。

こどもたちはかわいらしいしぐさや行動で、わたしの心をなごませてくれました。保育園で生活していると、心がきれいになるような気がします。あるときこどもたちと畑に、じゃがいもの種芋を植えました。そのとき、二人の男の子が、同じ服を着ていました。一人は大きい子で、もう一人は小さい子でした。ふだん、そんなに一緒に仲良くしているということはないのですが、そのときだけは手をつないで、一緒に楽しそうに歩いていました。たぶん一緒に服だったというのが、とてもうれしかったのでしょうね。とてもかわいらしかったです。一緒に服だったというだけで、うきうきとした気持ちになれるわけです。そうした気持ちは、わたしたち大人が忘れてしまったものだなあと思います。

でもこんな場合もあります。園庭でこどもたちと遊んでいると、わたしと同じ服を着ている女の子がいました。わたしはうれしくなって、「〇〇ちゃん、園長先生とおそろいの服や」と言いました。するとその子は、翌日からばったり、その服を着てこなくなりまして。わたしは少々、ショックでした。仲良しやと思っていたのに・・・。同時に、わたしは少し申し訳なく思いました。わたしはもう大きくなりませんから、その服がすりきれるまで、いつまでもその服を着ることができるのです。しかし、保育園のお友だちは大きくなりますから、その服がいやになると、新しい服であるにもかかわらず、着れなくなるわけです。お家でお母さんに「〇〇ちゃん、この服着なさいよ」と言われても、「いや。着ない」と言うわけです。まさか、「園長先生とおそろいだから、着ない」とも言えないでしょう。それでお母さんから「もう勝手な子なんだから」、なんて叱られていたら、かわいそうだなあと思いました。数カ月したら、その子がその服を着てきたので、ほっとしました。まあ、保育園や幼稚園というところも、いろいろな隠されたドラマがあるわけです。お家で、この子、なんて身勝手なことを言うのだらうと思っても、隠されたドラマがあるかもしれないので、まあ小さなお子さんをおもちのお母さん・お父さんは大目にみてあげてください。

誘惑を受ける

今日の聖書の箇所は、「誘惑を受ける」という表題の聖書の箇所です。このお話はキリスト教でとても有名な話です。イエスさまは悪魔から誘惑を受けられます。マタイによる福音書4章1―4節にはこうあります。

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、`霊に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。『「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある』。

イエスさまは断食をして、お腹がすいておられました。そこで悪魔は「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と言いました。悪魔は、なんとももっともらしいことを言って近づいてくるわけです。「誘惑する者が来て」とありますが、悪魔は「誘惑する」のです。無理強いをするのではないのです。だから気をつけなければならないのです。「こんな、どうですか」と誘うわけです。そして、もっともらしいことを言って近づいてくるのです。悪魔の一般的支持率は高いのです。しかし、イエスさまは毅然として言われました。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある」。かつこいいですね。「人はパンだけで生きるものではない」。「これは大切な言葉ですので、アンダーラインを引いておいてください。こんどテストに出します」と言うくらい有名な言葉ですが、皆さんであれば、「その次には『神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある』ってあるのよね」と言えるくらいであってほしいなあと思ったりします。イエスさまは「人は神さまの語りかけによって生かされているんだ」と言われました。

マタイによる福音書4章5―7節にはこうあります。

次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。悪魔は「聖書に書いてある」と言うわけです。わたしは不勉強ですので、こんなことどこに書いてあるんだろうと思いますが、悪魔は「聖書に書いてある」と言うわけです。確かに詩編の91編11―12節に書かれてあるのです。悪魔はよく勉強しているし、またその誘い方も上手です。「聖書に書いてある」。でもなかなかおもしろいと思うのは、わたしたちキリスト者が人を裁くときに使う言葉は、悪魔と同じですね。「聖書に書いてある」。わたしたちは自分が「聖書に書いてある」と言ったとき、自分が悪魔になっていないかということを考えなければならないと、この聖書の箇所は教えてくれているわけです。イエスさまはわたしと違ってよく勉強しておられたからでしょう、悪魔の聖書を用いての悪魔の誘いにも動じる

ことなく「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われました。

マタイによる福音書4章8—11節にはこうあります。

更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。と、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。今度は悪魔は、イエスさまを高い山に連れていって、世のなかのすべての国とその豊かな様子を見せて、こう言いました。「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」。悪魔は簡単なことで誘うわけです。「もし、ひれ伏すなら」と。ちょっとわたしにひれ伏しただけで、「みんなあげる」と言うのです。ちょっと心が動きそうになりませんか？一眼レフのデジカメも買える。新しいパソコンも買える。大きな液晶テレビも買える。愛する妻にダイヤモンドの宝石も買ってあげられる。「あんた、悪魔に魂を売るのでなかったら、妻に何もプレゼントせんのか」と言われてしまいそうですが、しかし、お金の問題というのは、皆さんもそうでしょうが、切実なことです。

昔、わたしが尿管結石になったときの話です。尿管に詰まっている石が、早く外に出てほしいのですが、なかなか出ませんでした。妻と尿管結石の話をしなが、「なんで、身体の中に、石があったりするんやろ。どうせなら、昔話に出てくるダチョウの金（きん）の卵みたいに、石やなくて、金が身体の中で、できたらいいのになあ」とわたし言っていると、妻も「ほんまや」と相づちをうってくれました。わたしの家はそんな感じで、日が暮れていくわけですが、もう少し「あなただいじょうぶ？」とか、やさしい言葉をかけてくれてもいいかなあと思ったりもします。わたしなどは悪魔の誘惑にかかったら、ひとたまりもなく、悪魔が「この石をパンにかえたら」と言われた段階で、「わたしは、石をパンではなく、金にかえてほしい」と言ってしまうそうです。しかし、イエスさまは言われました。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」。イエスさまは悪魔に有無を言わせず、「退け、サタン」と言われ、悪魔を追い払われました。聖書には「そこで、悪魔は離れ去った」とあり、「それじゃあ、どこにいったのだろう」ということになるわけですが、それはまた皆さんが家に帰って、じっくりと聖書を読んでくださったらと思います。「おお、なるほど、こんなところに、次は出てくるんか」と、「なかなか聖書もおもしろいなあ」と思えると思います。

誘惑の多い

世の中にあって

イエスさまは悪魔の誘惑にあわれたわけですが、わたしたちもやはり多くの誘惑に囲まれて生活をしています。子育てにおいても、わたしたちの世の中は、なかなか誘惑の多い世の中になっています。少子化にともない、幼稚園でも保育園でも、いろいろなサービスをはじめました。幼稚園でも延長保育をしたり、幼稚園が終わったあとに習い事に幼稚園が連れて行ったりすることによって、長時間、預かることができるようにしています。しかし、そうした保育が、本当に子どもたちのためになるのかなあと思ったりします。確かに親にとってはよいサービスでしょう。しかし、どんどん、どんどんと保育時間が長くなるサービスが、本当に子どもたちにとってよいことなのだろうかと思えます。

わたしが園長をしていた保育園は教会立で無認可の保育園でしたので、国からの補助は全くありませんでした。自分たちのやりたい保育をするために、あえて認可を受けていませんでした。保育園であるのにお弁当が必要で、預かる時間も幼稚園よりも少し長い時間くらいでした。保育園で一生懸命バザーをして、費用を稼いでいました。そうしたこともあり、だんだんと園児が減少して、わたしが高槻日吉台教会に赴任して数年後、閉園することになりました。

親の側の要望だけを大切にすれば、「長い時間保育をしてくれて、お弁当がなくて給食で、そしてわずらわしいバザーの奉仕などないほうがよい」に決まっています。お金だけの関係にして、サービスを提供してもらえる保育園がよいのかもしれません。そのほうがわずらわしいことがないのです。でも本当にそうでしょうか？わたしはそうは思いません。子どもたちは自分のために一生懸命にお弁当を作ってくれるお母さんやお父さん、また自分の保育園でお父さんやお母さんが一生懸命にお手伝いをしている姿を見て育ちます。そして世の中は、助け合ったり、力を合わせたりしながら、一生懸命に生きていくものだということを、知らず知らずのうちに、覚えていくのです。

そして、本当はわたしたちの世の中は、愛と善意が満ちあふれているべきなのです。みんながそのことを必要としています。わが子は愛のあるこどもに育ててほしいと思います。人の情けのわかるやさしい子になってほしいと思います。しかし、愛とか善意というのは、言葉で教えて、「はい、わかりました」というものではないのです。「みんなで助け合って生きていくのよ」と教えられて、「はい、わかりました」と答えても、それでわかっているということにはならないのです。愛と善意があふれている場で、自分が生活することによって、こどもたちは愛や善意ということ、知らず知らずのうちに身につけていくのです。

退け、サタン

人生において、わたしたちはときとして「退け、サタン」と言わなければならないときがあるのです。わたしたちの心のなかに、いいかげんな気持ちが起こってくるときがあります。「少々、ずるいことをしてもいいか」とか「まあみんなしているじゃないか」とか、「わたしは、石をパンではなく、金にかえてほしい」というような気持ちにゆれる者ですが、しかし、保育園のこどもたちは、イエスさまのように毅然として答えてくれました。「『ぼくの家来になるなら、ここから見える街を全部あなたにあげる。だからぼくの家来になりなさいよ』。みんなだったどうする？悪魔の家来になる？（ならないー）。え、でもおいしいものいっぱい食べられるよ。おもちゃもいっぱい買ってもらえるよ。どうする？（ならないー）」。

やはり悪魔の家来になったら、わたしたちはなんとなく後ろめたい思いを抱えることになります。やはりそれはちょっとつらいものです。わたしたちはすっきりとすこやかに生きる歩みを求めて歩むべきでしょう。「退け、サタン」。そのように呪文を唱えて、すっきりとすこやかに生きましょう。